

原告 吉住海斗 意見陳述

2025年6月23日

私は両親から身体・精神的虐待を受けて育ちました。兄、姉と父親が異なることが理由で、兄弟の中で自分だけが両親からの暴力の標的となり、学校にも通えない日々が続いていました。

中学1年生になったタイミングで、担任の先生からの支援で児童相談所と繋がり、中学2年生から措置を受け、児童養護施設で育ちました。この頃から、同じような境遇の若者をなんとかしたいと志すようになりました。

これまでの生活は、産む予定じゃなかった。死んでほしい。などのきつい言葉や暴力に溢れていましたが、児童養護施設に入ることで、そうした生活から解放されました。

児童養護施設に入って嬉しかったことの一つに、誕生日に何を食べたいかを聞かれたことがあります。これまでは、自分の意見を言った経験がほとんどない自分は、自分の人生を生きていいんだと思えたきっかけでもあります。その日は一日中泣いていました。

あの日から10年経ったいま、段々と当時の感覚が鈍くなっていくのを感じます。施設で暮らしていた時に伝えなかったことはもう出てこなくなってしまうのではないかとすら思うのです。

このままでは、声を届けるまえになくなってしまう？と感じ、私は24歳の時に立候

補しました。

時の流れは、過去を違う意味に塗り替えます。年月とともに輪郭を失う痛みもあります。社会人になった今の自分だから言えることもあるとおもいます。

それ以上に 18 歳で施設を出てまもない自分だから言えた事の方が多いはずです。

私からの願いは一つです。被選挙権年齢を引き下げ、「政治家」という選択肢を加えてください。

今の政治の仕組みでは、年齢の壁によって届く前に風化する声”があります。政治の場で「聞かれる」だけでなく、“当事者として導く側に立つ権利が必要です。人は同じ速度で歳を取り、平等に時間が流れます。18 歳だからこそ届けられる国民の声がある。私はそう確信しています。

これは若者を特別扱いする要求ではありません。眠っている可能性を社会の力へ変える一歩です。よろしくお願いします

以 上